

解放歌

松山市

七、 あゝ友愛の熱き血を 力はやがて憂いなき 飾る未来の建設に	六、 一致団結死を契い 行く手遮るものあらば 我らを阻むものあらば	五、 あゝ虐げに苦しめる 踏みじられしわが正義 涙は憂いのためならず	四、 蒼穹 牙ゆる月さえも 檣風 霖雨 千余年 狂宴 乱舞に散る花も	三、 鬼神もおののく迫害や 魂砕き胸やぶり 墳墓にさらす屍の	二、 我らはかつて炎天下 残虐の鞭触るとき 断頭台下露しげく	一、 あゝ解放の旗高く 光と使命荷いたつ 今や奴隷の鉄鎖断ち	解放歌 水平歌	柴田 啓蔵
結ぶ我らが団結の 全人類の祝福を 殉義の星と輝かん	堂々正義のみちゆかん 断々平として破碎せよ 一刀両断あらんのみ	奪い返すは今なるぞ 決然立つて武装せよ	九天廻る太陽も 我らのために照らざりき 我らのために咲かざりき	天地もふるう狂制に 恨みをこめて永えの 上に築きし奴隷国	地に足灼きしはだしの子 鮮血かざる荆棘の 鬼哭啾々地は暗し	水平線にひるがえり 三百万の兄弟は 自由のために戦はん		

「あゝ解放の旗高く」ではじまる解放歌は、旧制松山高校（現愛媛大学）に在学していた柴田啓蔵氏が、旧制一高・東寮の寮歌「嗚呼 玉杯に花うけて／一高第12回記念祭寮歌」のメロディーに詩をつけたもので、以前は水平歌と呼ばれていた。第一節は、「全国水平社創立宣言」にそって、水平運動とは何かといった思いを書き添えており、第二節から第四節までは、過去の部落の実態を現している。そして、第五節と第六節で、「水平社宣言」の「この際吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動を起せるは、寧ろ必然である」を参考にして解放運動への決意を示し、第七節においてその進むべき方向をうたいあげている。

柴田氏は、小学校へ通うようになった頃から、「痛苦苦渋を骨身に沁みて覚えさせられた」と語っている。しかし、「学校を止める」と訴えた柴田氏は、父に「部落民は無学と馬鹿にされ笑われた。部落民の身代わりになったつもりで、石にかじりついてでも学校を出てくれ」と涙ながらに諭され、奮起した。郷里福岡を離れ、松山に来たのも勉学に専念したいという思いからであった。その松山で、全国水平社創立の予告記事を目にしたのが転機となり、学校を中退して解放運動へ身を投じていくことになった。その決意を告白したとき、級長で親友でもあった景山誠一は、「部落の解放の運動に君がゆくと云う。実に偉大なことだ」と感激しつつも、指導教官、諸先生や級友らに託された思いを伝え慰留に努めた。それでも、「ゆかねばならぬ」との決意は揺らぐことなく、柴田氏は松山を離れた。多くの出会いと別れの中で、水平歌は作成された。

〔参考資料〕

柴田啓蔵 『あゝ解放の旗高く－「解放歌」の意味－』
守安敏司・藤田正・朝治武 『水平社宣言・解放歌』